

ファン・ゴッホ『星月夜』考

石坂 千春*

概要

フィンセント・ファン・ゴッホの「星月夜」について、天文学的な視点から考察した結果、描かれている星について従来の説とは異なる結論に達したので報告する。

1. 『星月夜』の謎

2013年、ポスト印象派の画家フィンセント・ファン・ゴッホ(1853.3.30-1890.7.29)[1]は生誕160年を迎えた。

彼の代表作『ローヌ川の星月夜』(1888年、オルセー美術館蔵)に描かれた星については、昨年、持論を展開した[2]が、名作と名高いニューヨーク近代美術館蔵の『星月夜』(図1)の星空もまた、謎に満ちている。

この絵は1889年6月、南仏サン＝レミの療養所で描かれたものであるが、月と金星以外の星については何を描いているのか確定した説がないのだ。

中央左下、糸杉の右隣に明るく大きく描かれている星は金星「明けの明星」だと考えられている。しかし、絵の右上隅に描かれている逆三日月型の月と金星は、



図1『星月夜』(ファン・ゴッホ1889年、ニューヨーク近代美術館蔵)

絵の中央左下、糸杉の右隣の大きな星は金星だと考えられている。

それぞれ別の日に見えていたものである[3]。なぜなら、この絵は、弟テオへの手紙(書簡番号782)[4]の「ついに、オリーブ畑の風景画と星空の絵を描いた」という記述から1889年6月18日までに描かれたことがわかっているが、1889年6月18日の月齢は19。したがって満月を過ぎ、下弦前の丸みをおびた形だった。月の形や位置が絵と同様になるのは、この4～5日後のことである。

[2]で報告したように、ファン・ゴッホは想像ではなく、実際に見た星空を描いた画家であるから、『星月夜』の背景に描かれている星々も、きっと、実際の星空と同定ができるはずである。

『ローヌ川の星月夜』につづいて、『星月夜』についても天文学的な考察を展開してみよう。

2. 『星月夜』についての2つの説

従来研究により『星月夜』に描かれた星については、2つの説が提唱されている。

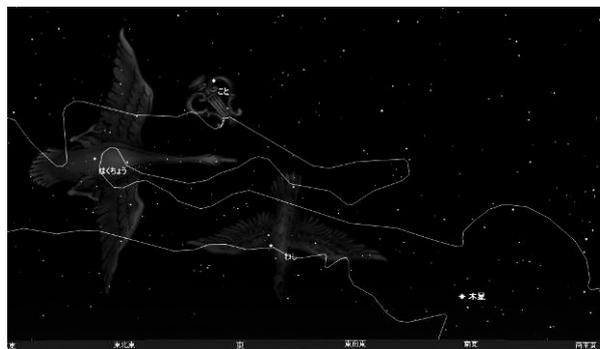


図2 サン＝レミ1889年6月15日21時の東天(アストロアーツ・ステラナビゲータ8により作図)。細い線は天の川の位置を表わしている。

*大阪市立科学館／中之島科学研究所
<http://www.sci-museum.jp/~ishizaka/>

2-1. ホイトニーの「はくちょう座」説

天文学史に造詣が深いハーバード大学名誉教授のチャールズ・A・ホイトニーは、画面中央を横切る渦が天の川を表わしたものとし、金星と月以外の星空は明け方ではなく、1889年6月15～18日の21時ごろの東空、はくちょう座付近を描いていると説いている[5]。しかし、はくちょう座(図2)は絵の星の配置とは合致せず、なにより、その日付では夏至が近いので、北緯43度のサン＝レミの日の入りはとて遅く、20時30分頃であった。

ホイトニーが主張する21時には天の川どころか、空が明るくて星がほとんど見えていなかったであろう。

2-2. ボイムの「おひつじ座」説

南仏サン＝レミでの1889年6月末の東天をステラナビゲータで再現してみると(図3)、美術史研究者アルバート・ボイムが指摘したように、金星はおひつじ座領域にあったことがわかる[3]。

だが、ボイムの説に従って月の左に並ぶ二星をおひつじ座の左の角のβ星とγ星にあててしまうと、ほかの星の配置が画面の星空と合致しない。おひつじ座は、左右を反転させた「へ」の字に並んだ頭部の三星(α星、β星、γ星)以外、明るい星がないからだ。それに、α星とγ星の間隔は角度にして10度もない。絵で描かれた金星が近すぎる。

3. 私見『星月夜』考

3-1. 「おひつじ座」説再考

ボイムの「おひつじ座」説そのものには難があるかも



図4 サン＝レミ、1889年6月22日3時の東の空を約30度傾けた。○印は『星月夜』と対応がつきそうな星を示している。月の位置や形が絵と合うように日付を1889年6月22日に設定したが、本文で記述したとおり、絵はこれより以前に描かれている。

しれないが、1889年6月の未明、金星がおひつじ座領域にあったことは確かなので、もう少しこの説について考えてみよう。

ボイム説の難点は、月の左にならぶ二星をおひつじ座のβ星とγ星にあててしまったことである。では、この二星がおひつじ座ではなく、うお座のο星とα星だとすれば、どうだろう？

図4はステラナビゲータで作成した、サン＝レミにおける1889年6月22日午前3時のおひつじ座・うお座領域である。

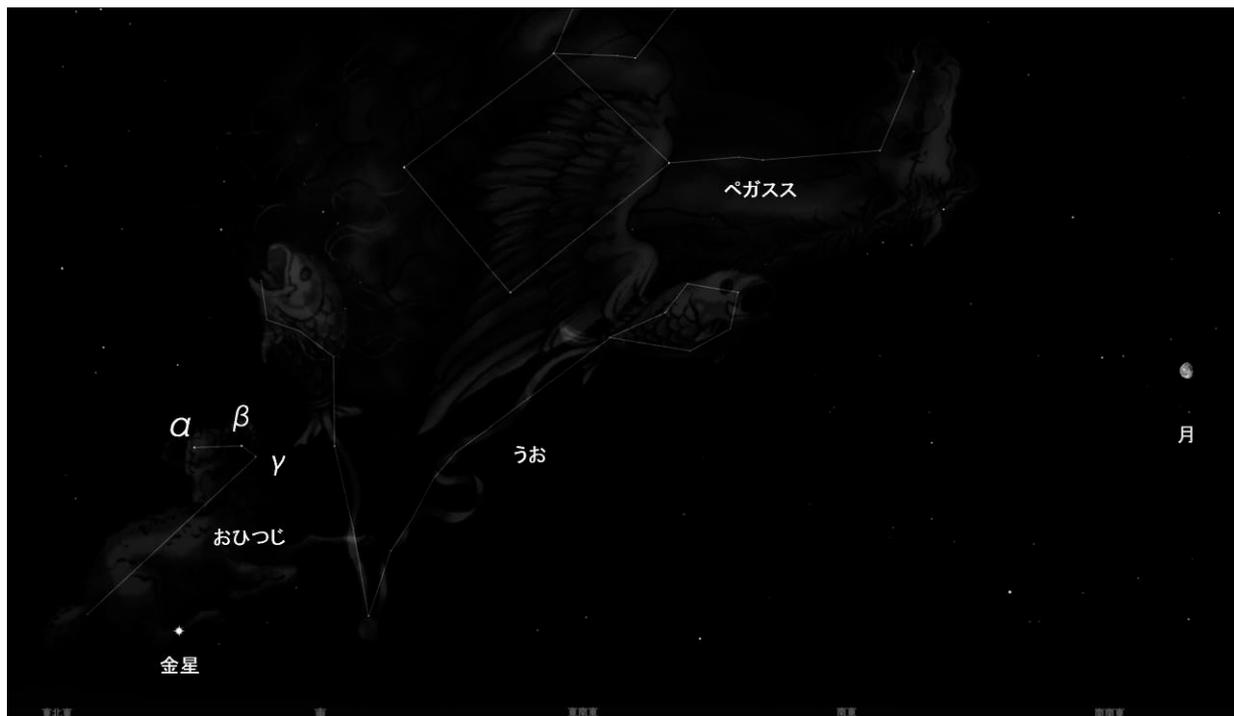


図3 サン＝レミ、1889年6月17日3時30分の東の空(ステラナビゲータで作成)

『星月夜』の遠景にある右上がりの丘の稜線が“水平線”になるような感じでキャンパスを約30度時計回りに傾けると、おひつじ座付近の星々の配置と対応するよう見えなだろうか。

キャンパスを30度時計回りにする構図というのは、筆者が文献[2]で論じた『ローヌ川の星月夜』における秋の大びしゃくの回転角とほぼ同じである。

ファン・ゴッホには星空を描く際に、キャンパスを画架に斜めにかける、あるいは、自分が寝そべて空を見上げた状態でスケッチする、といった独特のやり方があった、と考えるのは憶測がすぎるだろうか。

3-2. あるいは「しし座」?

ところで、これまで根拠を示さずに『星月夜』の画面中央左下の大きな星を金星だとしてきたが、これはテオへの手紙(書簡番号777)での記述に「今朝、日の出のだいぶ前に、窓から田園風景を見た。明けの明星(金星)だけが、とても大きく見えた」とあるからである[4]。

下弦過ぎの月や明けの明星は未明の東の空に見えるのだから、従来のファン・ゴッホ研究では、この作品は東を向いて描いたと考えられてきた。

だが、少なくとも月と金星は別々の日時での形や位置をキャンパス上に配置しているのだから、背景の星空も別の時刻・方角を描いたという可能性はないだろうか。そもそも、この絵を描いたサン＝レミの療養院におけるファン・ゴッホの寝室はたしかに東向きであったが、アトリエは西向きの中庭に面した位置だったのだ[6]。

そこで1889年6月宵のサン＝レミの西空をステラナビゲータで再現してみると、一部を除いて、『星月夜』の星空が、しし座の頭部と対応しているように見える(図5)。

一致しない点は、明るく見えていたはずの土星が小さな渦に置換していることと、画面の左上隅、実際には8.7等と非常に暗かった準惑星ケレスが、かなり明るく描かれていることである。

かねて、なぜファン・ゴッホが丸みを帯びた月を細く描いたのか気になっていた。

細い月はギリシャ神話の狩りの女神アルテミス(ローマ神ディアナ)の象徴である。金星はもちろん、美の女神アプロディテ(ローマ神ウェヌス)だ。

もしかしたら、ファン・ゴッホはこの絵で、本当は女神を描きたかったのではなからうか?

そう推測し、弟テオへの手紙(書簡番号782)でも言及されていた、この絵と同時期に描かれた『白い雲のあるオリーブ園』(1889年; ニューヨーク近代美術館蔵)のモチーフを見てみると、描かれているのは、知恵と芸術の女神アテナ(ローマ神ミネルヴァ)の象徴であるオリ

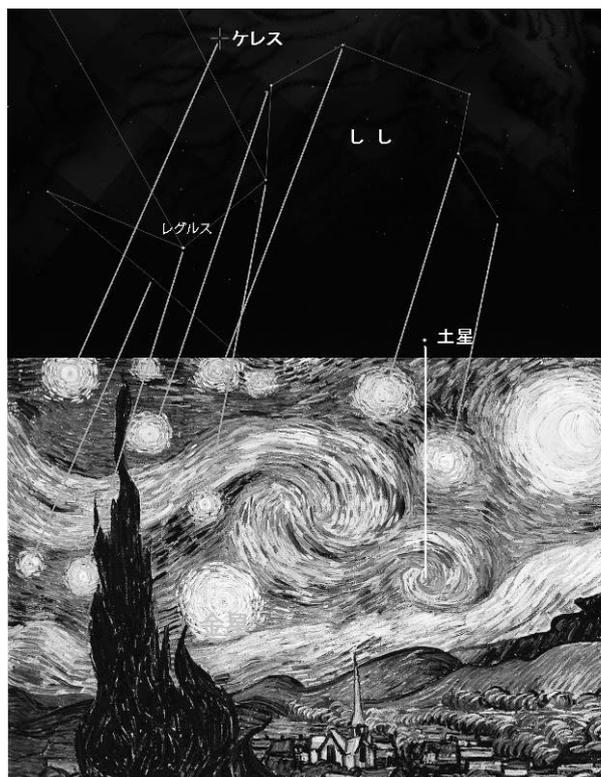


図5 ステラナビゲータで再現したサン＝レミ、1889年6月15日22:00の西空のしし座(上)と『星月夜』(下)の対比。

ーブである。一方、『星月夜』がしし座領域を描いたものだとするならば、明るく見えていたはずの土星＝男神クロノス(ローマ神サトゥルヌス)は意図的に描かれず、小さな渦に置換されていることになる。

ギリシャ神話のオリンポス十二神[8]の女神のうち、残るのは婚姻の女神ヘラと豊穡の女神デメテルだが、ヘラはローマ神ユノ、すなわち『星月夜』が描かれた6月(June)の守護神に対応する。そして、女神デメテルはローマ神ではケレスなのである。言うまでもなく、1801年に発見された最初の小惑星ケレスだ(現在は準惑星に分類されている)。つまり、対になる二枚の絵に全ての主要な女神の象徴が揃っている。

いや、準惑星ケレスがそこにあったからこそ、ファン・ゴッホが1889年6月、宵の西空を描いたのではないだろうか。もちろん、この説では、ファン・ゴッホがケレスの位置を知っていたことが前提となる。残念ながら、ケレスの位置を示した天文書が当時あったかどうか、調べがつかなかった。だが、一大センセーションを巻き起こしたケレスの発見から80年。1850年代まで、新惑星としての扱いも受けたケレスのこと。一般市民が目にする新聞・雑誌等にケレスの位置が記されていてもおかしくはないだろう。

さて、ではなぜ、ファン・ゴッホは女神の象徴を描こうと思ったのだろうか?

1889年4月、最愛の弟テオが結婚した。ゴッホ自身も生涯を通じて愛を求めていた(書簡番号780)が、療養院ではモデルになってくれる女性すら見つけられないうでいた(書簡番号782)。

この頃のファン・ゴッホはロマン主義的、宗教的な観念への回帰は否定しつつ、19世紀のロマン主義を代表する画家F・V・ウジェーヌ・ドラクロア(1798.4.26-1863.8.13)の手法をより深く追求することで、神の世界の顕在化である純粋な田園の自然を表現しようとしていた。

ドラクロアは古代神話の女神も描いていたが、想像で描くことができなかつたファン・ゴッホは、自然の中に女神の象徴を見出すほかなかつたのではないだろうか。

4. 結語

ファン・ゴッホが『星月夜』で描いた星空について、「うお座-おひつじ座」もしくは「しし座」である可能性について持論を述べた。

今回の議論は、「似ている」「…のように見える」といった、単なる主観的な感想である。

絵の星空と実際の星空との類似度を数値化し、客観的に評価するために、現在、パターン認識による検証を進めているところである。結果については、別途報告したい。

ファン・ゴッホがどんな思いで、いつ、どの方角の星空を描いていたのか、今となつては、本人に訊くことはできないが、天文学の知識を用いることで、作家の心を想像し、芸術作品を新たに天文学的視点でも楽しむことができる。

2012年11月18日に開催された天文教育普及研究会近畿支部会では、枚方市立樟葉西小学校の西村一洋氏より、『ローヌ川の星月夜』についてのACOP教育(アート・コミュニケーション・プロジェクト)[8]の実践報告があつたとお聞きした。拙論[2]が教育現場でお役に

立てたのなら、これほどうれしいことはない。

星空を描いた芸術作品はほかにもあるので、今後も“天文学的な鑑賞”を続け、天文教育の新しい題材を提供していきたいと考えている。

※天文教育普及研究会会誌「天文教育」2013年1月号に掲載された記事[9]に一部加筆した。

文 献

- [1] ファン・ゴッホの生涯や絵画におけるモチーフの意味などは、圀府寺司(2009)『ファン・ゴッホ 自然と宗教の闘争』(小学館)に詳しい。
- [2] 石坂千春(2012), 大阪市立科学館研究報告, 22号, pp.5-12.
- [3] Albert Boime(1984), "Van Gogh's Starry Night: a history of matter and a matter of history", Arts Magazine vol.59 No.4, pp.86-103.
- [4] フィンセント・ファン・ゴッホの書簡集
<http://vangoghletters.org/vg/>
- [5] Charles A. Whitney(1986), "The Skies of Vincent van Gogh", Art History vol.9 No.3, pp.351-362.
- [6] Ronald Pickvance (1986), "Van Gogh in Saint-Remy and Auvers", The Metropolitan Museum of Art (New York).
- [7] ギリシャ神話の主要な神々であるオリンポス十二神は、主神ゼウス(男:木星)、ヘラ(女)、アテナ(女)、アポロン(男:太陽)、アプロディテ(女:金星)、アレス(男:火星)、アルテミス(女:月)、デメテル(女)、ヘパイストス(男)、ヘルメス(男:水星)、ポセイドン(男)、ディオニソス(男)である。ディオニソスの代わりに、祭壇・炉の女神であるヘスティア(ローマ神ヴェスタ)を入れることがある。
- [8] 京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター(2009)、<http://acop.jp/acop/index.html>
- [9] 石坂千春(2013),「天文教育」2013年1月号, p.38